

## 海外派遣研修プログラム 実習報告書

神戸大学医学科 6年 宮田潮

【実習先】 タイ (マヒドン大学シリラート病院)

【派遣期間】 H27.4.4～5.1

### 1.初めに



マヒドン大学シリラート病院内に滞在し、神経内科、血管外科で2週間ずつ実習した。滞在期間中、学生は5年生を除き春休みであり、各科において学生は私一人であり、留学生も私一人であった。

実習は病棟での回診、外来の見学が中心であった。専門用語はほぼ全て英語であったものの、医師らのやり取りはほぼ全てタイ語で行われた。周囲の医師たちが、適宜英語で話の内容を説明してくれたため、要点は理解することが出来た。

### 2.神経内科

神経内科では、回診、外来とも神戸大学では見たことが無い疾患、あるいは症状が明確に出ている症例が数多くあり、教科書でしか見たことが無い身体所見を直に見ることが出来た



来たと言う点で、非常に有意義であった。外来では、主にレジデントが単独で診察を行い、必要に応じて教官に相談するという形式を取り日本では少し考えにくいような多数の外来患者を診察していた。曜日ごとに重症筋無力症外来、パーキンソン病外来、てんかん外来、認知症外来が開かれるなど、症例が非常に充実していた。レジデント向けの講義では、日本人による症例報告や論文が多数引用されていた。金曜日に、図書館でレジデントが専門医試験に向けた勉強会を開いており、トピックごとに持ち回りでプレゼンテーションをしていた。トピックは神経毒であり、パワーポイントは英語だったので、ある程度理解することが出来た。

日ごとに重症筋無力症外来、パーキンソン病外来、てんかん外来、認知症外来が開かれるなど、症例が非常に充実していた。レジデント向けの講義では、日本人による症例報告や論文が多数引用されていた。金曜日に、図書館でレジデントが専門医試験に向けた勉強会を開いており、トピックごとに持ち回りでプレゼンテーションをしていた。トピックは神経毒であり、パワーポイントは英語だったので、ある程度理解することが出来た。

### 3.血管外科

血管外科では外来にて超音波検査を数多く施行しており、実際に機器を操作しながら多数の静脈瘤、深部静脈血栓症、動静脈ろうなどの症例を見ることが出来た。また、触診、縫合についても教授から直接数多く指導していただいた。外来では、診察の始まりと終わりに

患者が両手を合わせて医師に感謝を示していることが印象深かった。



実習中は英語を使うしかないという状況に置かれたことで、うまい下手は別として、何とか英語を聞き取り、自分の言いたいことを英語で表現するという能力、度胸が身に付いたと思う。いわゆる受験英語しか

学習してこと無かった自分にとって、これが今回の実習で得られた一番の成果だと思う。私には基本的な情報を説明してくれることも多かったが、医師たちの会話の大半は医学生のレベルを超えた実践的な内容であり、なおかつそれを英語で聞き取り、理解すると言うことはかなり大変だった。専門用語に関しては、タイでは英語のみ使用するらしく、日本語を主に使用する日本の医学生である私は、海外の医師と情報交換する上での英語での医学教育の有用性と、日本の医学英語教育の遅れを痛感した。もちろん、私自身実習を通じて一定の進歩をしたと感じている。

#### 4.日常生活



平日は朝食、昼食はほぼ毎回医師にご馳走してもらった。製薬会社が提供のお弁当も含めてほぼ全てタイ料理であった。タイ料理はトムヤムクンを初めとする辛い料理が有名であるが、パターイなどの辛くない料理も存在し、どれもおいしく

く完食することが出来た。夕食は病院外でタイ人の学生や日本人学生と外食した。特に印象に残っているのは中華街である。タイ人の学生の多くは中国にルーツを持っていた。中国語とタイ語で店の看板が併記してあるのだが、彼らがタイに渡ってきた時の伝統を維持しているため、中国語は右から左へと書いてあり、日本人の私から見ても、どこか懐かしくかつ新鮮に感じた。中華街の規模は非常に大きく、料理も特徴的でおいしかった。

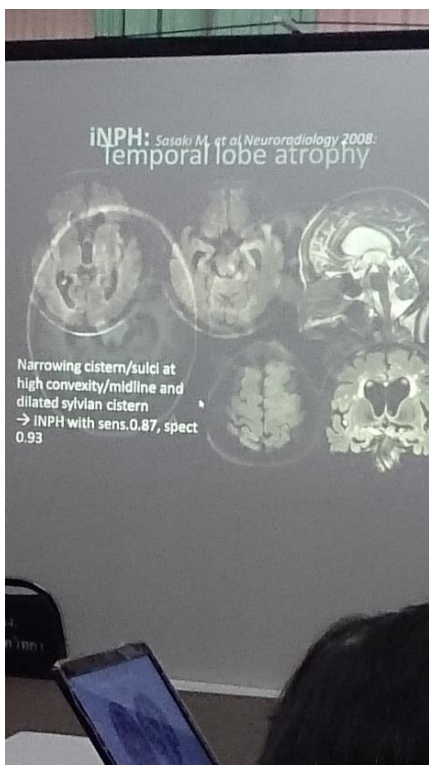
日本では野犬を目にしたことがなかったが、タイの病院内外では野犬が非常に多く、怖かった。外傷外科には、犬による噛み傷の患者が数多く訪れると言う。



休日、祝日はほぼ全て観光に費やした。2日間かけた一人旅の旅先の駅で現地の他大学の学生と知り合い、彼らを病院近くの屋台に案内し、後日彼らにソンクラーンと言う水掛祭りを案内してもらった。ソンクラーンは、本来、仏陀や目上の人の手を清め、彼らから我々の幸福を祈ってもらうと言う儀式で

ある。ソンクラーンの連休前に、神経内科の医局内で教授たちの手に水をかける儀式に参加したことは、非常に貴重な経験であった。他の日本人学生らと南のリゾート地へ行き、人生初のシュノーケリングを行い、美しい海と熱帯魚を見たことも、非常に印象に残っている。病院内の3つの博物館を含む8つの博物館を見学し、タイの文化と歴史についての理解を深めた。放課後に、伝統音楽部を訪れ、タイの伝統音楽を聴き、伝統楽器の演奏に挑戦したことも、非常に良い経験であった。

## 5.終わりに



神経内科で行われたレジデント向けの講義の中で、日本人による症例報告や論文が多数引用されていた。海外で医師や研究者として働く以外にも、日本発の英語の文献によっても世界に貢献出来るのだと感じた。今回の実習を通して、海外で世界中の医師や研究者と働きたいと言う思いが強くなった。日本で仕事をしながらでも、英語で仕事の成果を世界に発信していきたい。また、タイの医師のレベルの高さ、努力を感じたので、日本にいながらも世界からの研究成果に目を向ける必要があると感じた。

見知らぬ国に一人でいると言うことは自分の想像以上に困難が多く、心細かった。例えば、手術室の更衣室にしても、タイ語表記のみなのでどちらが男性用か分からない。英語の表記が一つあるかないかは、外国人にとって非常に重要な差であることに気付いた。日本でも、ハード面において、可能な限り英語表記を増やすべきだと感じた。途方に暮れている私に対して、

タイの人々はとても親切にしてくれた。私も、日本で困っている外国人がいたら、出来る限り助けようと思った。ハード、ソフト（我々の意識）の両面で、私たち一人ひとりが国際化していくことが、日本に必要だと感じた。